

美術学科 FD 「成績評価の妥当性と授業における到達目標の達成状況の検証」

日時 令和8年3月10日(月) 10時30分～12時00分

教室 A214 教室

出席者 権田、新井、本山、堀、和田、大谷、大場

本研修は、「成績評価の妥当性と授業における到達目標の達成状況の検証」をテーマとし、各教員が担当授業の GPA 分布および授業アンケートをもとに、今年度後期の担当科目を中心とした振り返りを行い、意見交換を行った。はじめに新井より、成績評価の妥当性に関する論点として、次の点を共有した。(評価分布の適切性/S 評価・A 評価の比率や偏りの有無/評価基準の明確性/印象に偏った評価となっていないか/講義科目でも一回のテストやレポートのみに依拠した評価となっていないか/努力点や人間性が過度に加味されていないか/コースや学科を越えて見た際に S 評価・A 評価が妥当なものとなっているか)

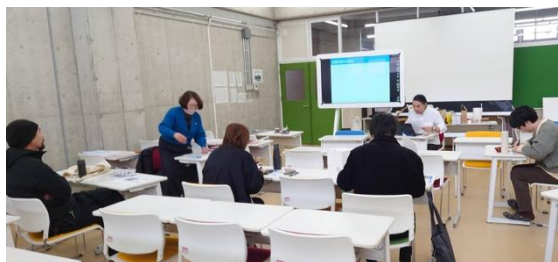
また、授業の到達目標とその達成状況については、次の観点から各担当科目の振り返りを行うことを確認した。(学生の取り組み状況/授業の到達目標に対する達成状況と手応え/うまくいった取り組みや効果的であったフィードバック方法/今後の改善アイデア)

(総評)

成績分布の面では近年かなり整理されてきており、特に常勤教員の間では、成績評価を意識した配点や運用が一定程度定着してきている。また、授業アンケートでは学生の満足度や前向きなコメントが得られていた。

一方で、授業を計画的に休む学生や、実習科目であっても欠席が多い学生がやや目立つ傾向にあることが教員に共通する実感として浮かび上がった。アンケート結果は良好であり、好意的なコメントも見られ最終的な作品や成果物も一定の形にはなっているものの、教員の実感としては、そこまで十分によかったと言い切れるのかについてやや疑問が残るとの意見もだされた。学生たちは決して怠惰というわけではないが、コロナ禍を経験した世代として、理由を伝えれば休める、多少の欠席や遅刻はやむを得ないといった感覚が、学習習慣や出席意識に影響している可能性も指摘された。

近年は特に、出席状況や時間管理の面で最後まで踏ん張れない学生が増えている印象が共有され、小さな遅刻や欠席、時間に対するルーズさをどのように指摘し、指導改善につなげていくかは、次年度に向けた美術学科の課題として確認された。



(以下、各教員のコメントを抜粋)

(新井) マンガ・キャラクターコースは、卒業制作において非常に高い満足感が得られたとまでは言えないものの、全体としておおむね一定の成果があった。しかし期待していた学生にもうひと伸びが見られず、進め方の面でやや課題も残った。

キャリアセミナーについては、学内・就職支援室・学外といったさまざまな視点から就職を考えられたことがよかったという意見があり評価が得られた。アンケート上は前向きな記述が見られる一方で、2月の模擬面接会や3月の合同企業ガイダンスを欠席する学生も一定数おり、意識が行動に十分結びついていない。美術棟内に就職支援情報を掲示するなど、学生が就職を意識しやすい環境づくりを進めたいと考えている。

(権田) 工芸論では、学生を意欲的に学びへ乗せていくことを意識した授業設計を心がけた。20点満点のレポート課題を5回実施し、最終段階ではレポートに加えて学生同士によるディスカッションも取り入れた。知識を受け取るだけでなく、自分の意見として表現する機会を設けることで、自身の学びを自覚する良い機会となり、内容も少しずつ具体的にようになってきている。

(大場) インテリア・コーディネートコースでは、教員と学生間で密にコミュニケーションが取れ、出席状況も非常に良好であった。また、業界的に就職活動の動きが早いと、適度に危機感を持たせながら指導することで、授業と就職活動がうまく連動できた。

コンピュータ表現演習Ⅱでは、1年生の履修率が7割程度で、例年よりやや少なく、途中で履修をやめる学生も見られた。例年と同様に6つの課題を設定していたが、課題を終えられない学生がやや増えた印象があり、今後は内容をやや軽くすることも検討課題として挙げられた。

(大谷) デザイン・ビジネスコース1年生については、学外へ連れ出す機会も多く、さらに学びたいという意欲が高かったと評価された。授業ではAIも取り入れ、新しい試みを行うことができたほか、実社会でも活用されている技術を踏まえながら、それをういっつオリジナリティをどのように出すかを考えさせることができた。2年生については、卒業

制作における作品の質や学生アンケートの評価は高く、教員としてはうれしい結果であったが、遅刻や欠席が多く、途中の取り組みには課題も見られたため、アンケート結果と実感にやや隔たりも感じられた。

ポートフォリオ演習では、Aクラスは高評価であった一方、Bクラスは低めの評価となり、同じ授業でも差が見られた。PDFの書き出し方やデータアップロードの方法も含めて細かく指導し、Classroom等で確認できるようにしたほか、進捗ごとに提出させることで途中経過を把握できるようにした。その結果、PDF形式への理解も進み、発表やフィードバックも円滑に行うことができた。

(和田) プレゼンテーション演習では、初めて午前中の授業実施となったが、全体として3回程度、計画的とも思える頻度で欠席する学生が見られ、やや欠席の多さが気になった。また、最後の発表をもとに成績を付けた際、A評価がやや多かった可能性があり、成績の付け方については今後さらに工夫したい。

ゲーム・映像コース1年生については、授業形態として教員から伝える内容が多かったためか、コミュニケーション面はやや低めであった。2年生については、授業アンケートの回収率が低く実態がつかみにくい面はあるものの、体感としては比較的意欲的に取り組めた学年であった。

(本山) 油画・日本画コース2年生については、例年より意欲も感じられたものの、欠席が多かったことが大きな課題として挙げられた。特に後期になると歯止めがかかりにくく、意欲が離れ気味になる学生や取り組みにムラのある学生が見られた。1年生については、対応の難しい学生が多く、制作に向かわない学生が多い印象があり、懸念している。週5日から週4日の実習になったことの影響も考えられるのではないかと考えている。

(堀) ファッション・スタイリストコース1年生については、演習内容に対して学生からの質問も多く満足度は高かった。少人数コースであることから人間関係等の影響も受けやすく、能力のある学生が早く課題を終えた後に出席が滞ることもあり、指導上の難しさがあった。2年生については、継続的な出席や生活リズムの維持に困難を抱える学生への対応が難しかったとの報告があった。

デッサンIIでは、5限の受講者が12、3名いたものの、後半には半数程度の6名ほどに。5限開講の難しさもあったが最後まで残って取り組んでいた学生は一生懸命取り組んでいた。作品に手を入れながら指導を行ったことに対してはよい反応も見られた。自身としては十分にコミュニケーションを取ったつもりであったが、その点はアンケートでやや低評価であり、話し方がやや一方的になっていた可能性もある。